

建築家大旗正二の経歴と建築活動について

—地方における建築家の活動に関する研究—

A LIFE AND WORKS OF ARCHITECT SHOJI OHHATA

—A study on the activities of the architect in the Hiroshima district—

李 明*, 石丸紀興**, 岡河 貢***

Ming LI, Norioki ISHIMARU and Mitugu OKAGAWA

Shoji OHHATA, born in 1913 in Shimane Prefecture, graduated from Yokohama Engineering College in 1934. He was the student of the famous architect and educator Junpei NAKAMURA. After his graduation, he worked as an architect in the architecture section, construction works office and Local Administration Department of the Dalian Manchurian Railway Company. He returned to Japan after the Second World War. He made great contributions by reviving buildings of Hiroshima City and by making a small design institute in Hiroshima as his base. In 1954, he established MURATA OHHATA Design Institute with Tadashi MURATA. In 1966, he independently established OHHATA Allied Architecture Design Institute. He experienced the Prewar and Postwar Period and engaged in his career from Manchuria to Japan. By making Hiroshima City his activity center, he developed his activities to a large region including Kyushu, Hokkaido, Yamaguchi Prefectures, etc. He is one of the architects who has given full play to his talents.

Keywords: *Shoji OHHATA, Architect, Modern Architecture, Hiroshima, Agricultural Cooperative Building, Miyajima-cho Government Building*

大旗正二、建築家、近代建築、広島、農協ビル、宮島町庁舎

1. はじめに

大旗正二は大正2年5月島根県で生まれ、昭和6年に横浜高等工業学校建築科に入学し、中村順平の弟子となる。昭和9年卒業後南満州鉄道株式会社建築組織にて建築活動を行い、戦後被爆都市広島初の設計事務所である暁設計事務所の建築家として広島の復興において旺盛な建築活動を行う。昭和29年建築家村田正¹⁾と共に、村田・大旗設計事務所を開設し、昭和41年には独立して大旗連合設計事務所を創立する。このように大旗正二は戦前・戦後に渡って、満州国での建築活動を始め、地方都市広島を拠点に九州、北海道、山口県などにおいて幅広くその才能を発揮した人物である。

本稿では、中村順平の弟子として出発し、戦前戦後を通じて活躍した建築家の一人である大旗正二（以下大旗と略す場合がある）を取り上げ、彼に関する諸文献と調査を通して、その経歴と建築活動について論じるものである。今回、終戦直後広島における建築事務所の活動実態に関する調査を進めている過程で、大旗に関するいくつかの情報が明らかになった。大旗の経歴については拙稿²⁾において触れているが、その後の調査により新たな知見を得た点があるので、改めてその経歴と建築活動について論じておきたい。これまで日本の近代建築史において、中央における建築・建築家の活動が目され、地方における建築家の活動は重要視されてこなかったと言

っても過言ではない。また近代以後に限っても解明しなければならぬことが無数に残されており、本論文はこのような状況に対応する研究の一助としても重要である。西澤泰彦も指摘している³⁾ように、このような地方における建築家の活動に関する研究の進展によって日本近代建築史を総体としてよりの確に把握する事が可能になると考えられる。

研究の方法として、横浜高工時代や南満鉄株式会社建築組織時代（以下満鉄時期と略す場合がある）の活動については大旗正二の本人や当時の記事などにより、暁設計事務所時代以降の活動については村田正、河内義就⁴⁾の生前の証言や大旗本人に連絡を取り、訪ねるなどヒアリングによる取材を中心に、当時の関連記事などの文献と調査を通じて補完した⁵⁾。なお、地方における建築家の活動に関する既往の研究としては、西澤泰彦や、角幸博、上田恭嗣、石田潤一郎の研究と拙稿⁶⁾等があり、本稿はこれらにも多く負った。

2. 大旗正二の経歴

大旗正二は大正2年（1913年）5月島根県で生まれ、昭和6年に横浜高等工業学校（横浜高工と略す場合がある）建築科に入学し、中村順平の弟子になる。中村順平の指導の下での写作為して、昭和6年1年生の時の「TEMRLÉ D'ÉRECHTHEE A ATHENES」(図1)

* 広島国際大学建築創造学科 助手・博士(工学)

** 広島国際大学建築創造学科 教授・工博

*** 広島大学大学院工学研究科社会環境システム専攻 助教授・工修

Research Assoc., Department of Integrated Architecture, Hiroshima International University, Dr. Eng.

Prof., Department of Integrated Architecture, Hiroshima International University, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Graduate School of Eng., Hiroshima University, M. Eng.

建築図画と宮島3週間宿泊にて一部の実測に基づいて描いた「厳島神社高舞台及び拝殿正面図」(150cm×70cm 図板墨石仕上げ)(図2)がある。大旗の自述によると150cm×70cmの図板が大きいため中村順平恩師の部屋で製作したという。なお2年生の時のエスキス(木炭紙全紙16時間仕上げ)として「法隆寺百斎観音厨子」がある。これらの作品から大旗が受けた建築教育は中村の古典に根ざす建築の根元的な美的把握を目指した教育であったことが判る。大旗の記述によると、昭和8年には満州産業開発学徒研究団に加わり、一ヶ月間の全満視察旅行をする。なお研究団を離れ、新京都市計画の開発、調査のため20日間残留、陸路汽車にて朝鮮平壤に行き、3日間楽浪古墳などを見学する。さらに無銭旅行として、開城、京城、太田、慶州仏国寺を見学してから釜山港より乗船し、門司港に上陸。大旗は「平壤より20日間、満州・朝鮮文化に触れたのは大きな収穫であった。…10月初め学校へ戻ると中村先生のお喜びのご様子を初めて拝顔した。」と当時のことを述べている。このように中村順平のボザール式の建築教育⁷⁾を受け、建築家への情熱は、大旗の若い心へ植え付けられていた。昭和8年11月南満州鉄道株式会社入社試験で採用決定、昭和9年4月南満州鉄道株式会社に入社し、終戦まで満鉄大連本社地方部工事課⁸⁾、満鉄総局大連工事事務所建築係などの建築組織において技術員として活躍する。当時大連では建築設計において建築技術者資格が義務づけられており⁹⁾、昭和13年大旗は一級主任技術者資格を取得していたのである。昭和20年終戦でソ連に抑留され、ウズベキスタン(Uzbekistan)に着く。在ソ連時の大旗について、陶芸家加藤唐九郎は「昭和31年、AA連帯委員会の文化芸術使節団が結成され、ソ連に行って新設のオペラ劇場を見学した。この劇場の完成には、日本人捕虜の中の優れた建築家の力も大きく助けているといわれた。そんなある日、日本人捕虜の中の優れた建築家というのは、大旗先生であったことがわかったとき私は驚き、そしてこの巡り合わせを嬉しく感じた。」と述べている¹⁰⁾。大旗も述べている¹¹⁾ようにソ連ではいろんな人に恵まれて大学の図書館とかにも入れるようになり、建築デザインにも参加する。

昭和23年7月帰国し、島根県に帰る。8月広島で暁設計事務所¹²⁾の建築家村田正、河内義就に出会い、同年10月暁設計事務所に入所。暁設計事務所に入ることになった時の心情について、大旗は「東京に行くか、広島に行くか、非常に大きい事柄だった。しかし広島には河内氏がいて、何か大きな魅力があった。それで広島に着いた。」と述べている¹³⁾ように、同じ中村順平の弟子であった河内義就の存在が大旗正二の広島の暁設計参加に、大きな影響を及ぼしたと考えられる。こうして大旗は、建築家村田正、河内義就とともに、焼け野原になった広島を背景に活発的に建築活動を行なう。昭和26年に河内義就が独立して河内義就建築設計事務所を設立し、昭和29年6月には残された村田と大旗が暁設計事務所から抜けて村田・大旗建築事務所を開設する¹⁴⁾。昭和36年9月、米国ならびに欧州各地を視察しながら、厚生施設、特に病院施設を重点的に考察研究し、翌年2月3日藤田講堂で「欧米視察報告会」の発表を行う¹⁵⁾。昭和40年2月23日、日本建築士連合会主催の日本建材協会中国支部展示場の懸賞競技建築設計応募作品の審査員になる。大旗は村田・大旗建築設計事務所時代の作品が数多く、広島地域を中心に全国まで幅広く設計活動を行った。昭和41年大旗は村田と別れ、大旗連合建築事務所を設立する。当時の状況について大旗は「村田・大旗建築事務所

所を解散し、心を同じくする28名のスタッフと大旗を主軸に連合し、大旗連合建築設計株式会社として発足した。」と述べ、また「連合という名称になっているのは、所員の個性の連帯というほどの意味である。」と連合の意味を解析している¹⁶⁾。こうして「暁設計」の名称も消え、村田相互、大旗連合、河内義就設計事務所が並べ立ち、広島の建築事務所組織の層の厚さを形成した。大旗連合事務所は広島地区を中心に九州地域など幅広く建築設計活動を行い、数多くの作品を残している。昭和43年～昭和53年、広島市建築法規研究会理事。昭和53年8月、息子の太旗健が代表取締役社長に就任し、大旗正二は取締役会長に就任する。事務所は拡大され、九州支社、北九州事務所、福山営業所、山口営業所、徳山営業所を設けている。平成5年大旗は相談役に就任し、現在に至る(表一)。

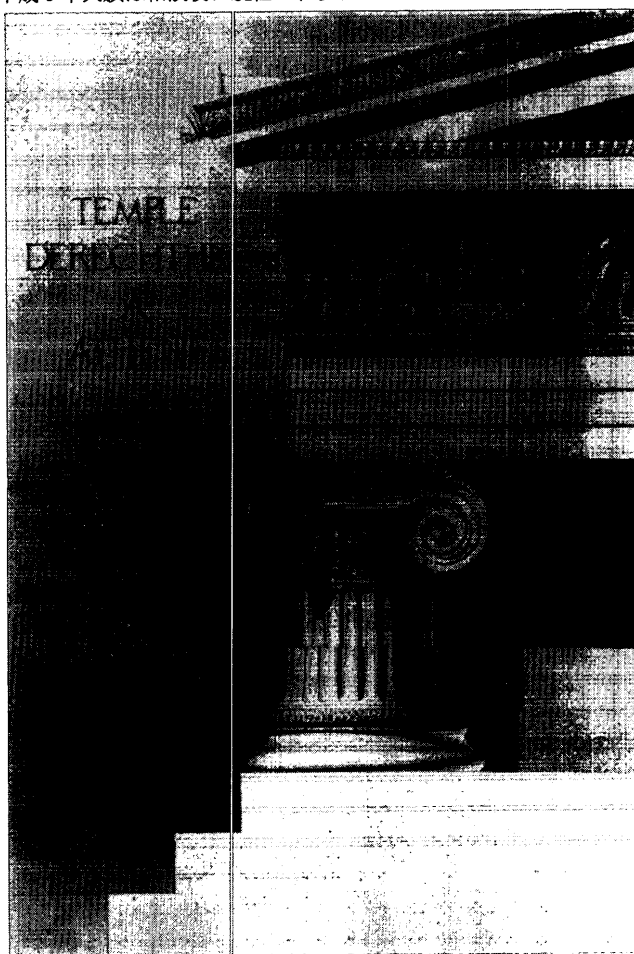


図1 TEMPLE D'ERECHTHEE A ATHENES

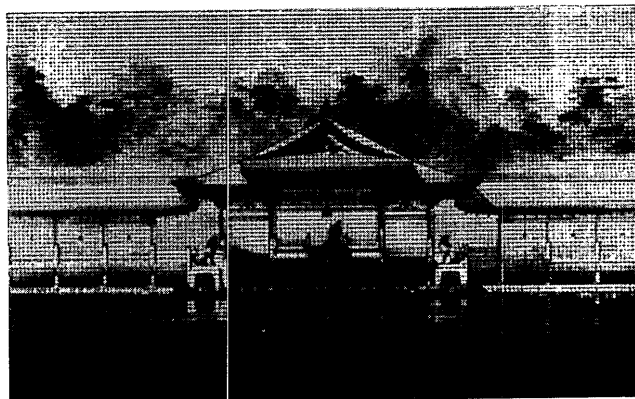


図2 厳島神社高舞台及び拝殿正面図

表-1 大旗正二の略歴

年号	出来事
大正2年	5月島根県で誕生。
昭和6年	横浜高等工業学校建築科入学、中村順平の弟子になる。1年生の時の作品として「TEMPLE D' EROCHIMEE A ATHENES」建築区画と「厳島神社高舞台及び拝殿正面図」(150cm×70cm図板墨石仕上げ)実測図がある。
昭和7年	2年生の時法隆寺百衲観音厨子(展覧会用)をエスキス(木炭紙全紙)。
昭和8年	3年生の時満洲産業開発学術研究会に加入し、一ヶ月間の全滿視察旅行をする。11月南満洲鉄道株式会社入社試験を受けて採用決定。
昭和9年	3月横浜高等工業学校建築科卒業、4月南満洲鉄道株式会社大連本社地方部工事課に入社。
昭和12年	昭和農工事務所本館コンペ2等入選(鉄道総局?島田吉郎に協力)。荒井龍三と協力して戦跡記念碑設計懸賞競技にて小忠壘塔部分1等に入選する。満鉄大連駅工事中設計変更などに関係。
昭和13年	10月大連市公会堂コンペ佳作入賞(荒井定吉(横井建築事務所)と共同)
昭和15年	鉄道総局大連工事事務所建築係技術員。
昭和20年	終戦で捕虜されソ連に行く。ウズベキスタン(Uzbekistan)で建築家ジュセフと一緒に設計関係の仕事をする。
昭和23年	7月帰国し島根県に帰る。8月広島にて村田正、河内義就に会う。同年10月曉設計事務所に入所。入所同時に農協ビル設計に着手。
昭和24年	3月初旬農協実施設計完了。広島平和公園コンペに参加したが落選。名古屋、宇都、徳山等地域で事務所建築設計に携わる。
昭和29年	6月、村田・大旗建築事務所設立。
昭和33年	3月、尾道厚生病院の作品が広島県建築士会会誌第7号で紹介される。
昭和34年	10月1日八幡宮病院の全国競技設計で一等入選し、12月戸畑文化センター競技設計で1等入選する。
昭和35年	広島県建築士会建築作品コンクールに日本赤十字社広島支部作品が受賞
昭和36年	9月、米国ならびに欧州各地で厚生施設・病院施設を重点的に見学視察。
昭和37年	2月3日藤田講堂、「欧米視察報告会」の発表。
昭和40年	2月23日、日本建築士連合会主催の懸賞競技建築設計応募作品の審査員
昭和41年	3月、大旗連合建築事務所設立。当時の職員は28名。
昭和43年	宮島町庁舎コンペで一等入選。昭和43年～昭和53年、広島市建築法規研究会理事。
昭和44年	2月宮島町庁舎の建築が広島県建築士会会誌第25号に新建築物として紹介される。6月同27号に同町小学校が紹介される。
昭和46年	8月広島錦水ホテル、広島信用金庫町前支店の作品が広島県建築士会会誌第39号に新建築物として紹介される。
昭和47年	6月15日、『人と建築の交り求めて…あゆみ/大旗連合建築設計作品集(創始社)』を発行。12月因島ロッジの作品が広島県建築士会会誌第47号に新建築物として紹介される。
昭和51年	『大旗連合建築設計株式会社経歴書』を出版。
昭和53年	大旗連合建築設計事務所副総務局長。取締役社長に息子の大旗龍就任。
昭和55年	月刊特集『近代建築』5月号に大旗連合建築設計の作品(1966年～1980)が紹介される。
昭和59年	月刊特集『近代建築』8月号に大旗連合建築設計の作品(1980年～1984)が紹介される。
平成5年～現在	大旗連合設計事務所の相談役に就任し現在に至る。

注：表-1は大旗正二本人に聞き取りを行い、又広島市建築行政協会創立30周年記念誌『よせむね』(昭和58年1月28日発行)、社団法人広島県建築士会『広島県建築士会25年史』(昭和53年3月10日発行)、西澤泰多「南満洲鉄道株式会社の建築家—その変遷と特徴」『アジア経済』35巻7号、1994年7月)などを参照し筆者が作成した。

3. 大旗正二の建築活動

大旗正二の建築活動を、満鉄時期、曉設計事務所時期、村田大旗建築事務所時期、大旗連合建築事務所時期に分けて論ずる。

3-1. 満鉄時期

大旗は、横浜工高時代中村順平の元で建築を習い、本格的な建築活動は昭和9年満鉄大連本社地方部工事課から始まる。彼の満鉄での初の仕事として、昭和12年竣工の満鉄大連駅工事中設計変更に関係する。大旗は「昭和9年入社時に設計がほとんど出来、工事中設計変更などに関係、乗降客の移動の処理等、先進的であった。」と当時の状況を述べている。また、社外友人事務所¹⁷⁾の助手として三越百貨店(昭和12年)のダンスホールの設計を手掛ける。大旗の自述によると、佐藤功一設計の東京銀座裏ホールを参考に設計に取り組んだという。そして大連ヤマトホテル(明治42年竣工)の補修設計に参加する。なお、昭和13年島田吉郎¹⁸⁾と協力して昭和製鉄所本部事務所全国コンペ2等に入選し、荒井龍三と協力して戦跡記念

碑設計懸賞競技にて小忠壘塔(小は山間部戦跡地に建てる暗号「刀」と称した)部分1等に入選する。翌年10月20日荒井定吉(横井建築事務所)との共同作品が大連市公会堂コンペ佳作となる等、積極的にコンペ活動に参加した¹⁹⁾。浜口隆一も「そこでは時代の幸運もあって、単に個々の建物を設計し作るというだけでなく、地域開発や都市計画の課題にも、とにかく取り組む機会が与えられ、これは大旗氏の眼を広く開けてくれるものだった。」²⁰⁾と評価しているように、一級主任技術者資格を取得していた大旗は、満洲において幅広く建築活動を行ったと考えられる。昭和20年終戦でソ連に抑留されるが、当時ウズベキスタンで建築家ジュセフと一緒に仕事をする機会があり、オペラ劇場の設計において、劇場内部の壁面装飾デザインを担当する。劇場建築について、陶芸家加藤唐九郎は、「この劇場の建築は、ウズベック様式であり、内部の各室には、ウズベック各都市旧来の様式を取り入れている。」²¹⁾と述べている。

その他、大旗の自述によると、昭和13年から15年にかけて、満鉄の教育機関、病院、鉄道関連施設などいろいろな計画や設計に参加したというが、大旗自身も具体的に手掛けた建築物名称を覚えておらず、その詳細は不明である(表-2)。

表-2 満鉄時期の大旗が関係した作品(昭和9年～昭和22年)

作品名称(協力・構造・竣工年・所在地・残存状況)
●満鉄大連駅舎(設計変更参与・RC造・昭和12年・大連・現存)
●三越百貨店(参与・RC造・昭和12年・大連・現存)
●大連ヤマトホテル(補修設計参与・レンガ造・明治42年・大連・現存)
●タシュケントオペラ劇場の壁面装飾(参与・RC造・昭和21・ウズベキスタン・現存)
その他、満洲の教育機関、病院、満鉄の施設など多数の設計に参加したと言うが、具体的名称については覚えていない。

注：表-2は大旗の本人から提供された資料を中心に諸文献を参照し筆者が作成した。

3-2. 曉設計事務所時期

昭和23年、戦後広島初の建築設計事務所である曉設計に入所した大旗は、建築家村田正、河内義就とともに、焼け野原になった広島を背景に活発的に建築活動を行なった。

大旗は、「昭和22年頃、設計事務所は社会的に地位が余りなく、建物を建てるために設計をすることであった。被爆直後の建築は、まず材料を確保してから、建物の建設が着工される、ということになったので、鉄筋とコンクリートを確保しさえすれば、設計事務所の設計が現実化するという状況であった。」²²⁾と当時の復興建設の初期における建築家の地位と役割について述べている。村田正も「私たちが復興の時代に築きあげた建物は年々その面影をなくしています。しかし今の広島を語る時広島を愛した人々の血と汗と涙の結晶を語らないわけにはいきません」²³⁾と述懐しているように、広島市の戦災復興の中で、多くの建築家や技術者が心血を注いだことが想像される。なお河内義就は「原爆焼け野原のデルタの復興は給排水、橋、道路、ガス、送電といったインフラが根底にあり、70年草木も生えぬと言われたこの市に市民が食料、住宅難の中で生き抜き、何とか自分のバラックを建てて事務所を作らねばならなかった精神面の努力と熱意にあった事は疑いがない事だ。しかし、目に見える仕事は設計家及び大工さん、後になってぼつぼつ成立した建設業者の業績であった。」²⁴⁾と復興における建築家の役割を述べている。

このような背景の中で、大旗は、河内義就、村田正らとともに広島建築家クラブ(昭和23年末設立、現在広島県建築士事務所協会)を結成し、積極的に設計活動を行った。この時期の大旗が参与した建築作品をまとめると、表-3のようになる。

ここで、大旗の戦後の初の設計である農協ビルの建築を取り上げて見よう。大旗は、入所同時に広島県信用農業協同組合連合会長桑田哲夫の推薦により、当連合会本部事務所（以下農協ビルと略す）の設計計画に着手する。当時被爆によって焼け野原になった広島で初めての鉄筋コンクリート造建築として、昭和24年に昭和町に建設されたRC、4Fの3棟の市営住宅と観音の県営住宅があった。昭和町のアパートの設計は、当時英彦軍のジャビー少佐が指導したと言われ、構造を担当したのは藤本初夫だった。このような背景の中で晩設計の村田正の努力で全国初の民間RC造事務所への資材配布が認められたのが農協ビル²⁵⁾であった。大旗正二は、「農協ビルを建てる時には、セメントの準備が出来てから、鉄筋は呉造船工場からもらうようになったが、鉄を運んできて、鉄筋を自分で作るようになった。」と復興建築の材料の困難さを語っている。12月10日実施設計決定。農協ビル(写真1)は、昭和24年に着工し、昭和25年に竣工した(総工事費6千万円、昭和59年撤去)。鉄筋コンクリート造4階建てのこの建物は、客を外から直接入れる地下のグリルや龍山石を貼った外壁と柱列のある営業室のデザインが特徴を表わしている。営業室の外部デザインは、迫り出した2階軒部分を支持するための露出した柱が並んで外廊下を形成し、その柱頭と軒の辺りの部分がデザインされ、そのためやや影の深い建物となり、道路の向かい側の被爆建物である広島市役所²⁶⁾との調和を表している。農協ビルについて、大旗は浜口隆一との対談の中で、「市役所前の農協ビルをやってもらって、当時は全国的に、規模において一番大きいんじゃないかと思うんです。まだセメントも、鉄筋も何かも得られない時に、そういうものを作りたいと意欲を燃やしていた。当時としては、歴史的に見ても広島発展のもと、ひいては日本のものじゃないかと思えます。あえてそれができたということは非常に広島の発展に大いに寄与したし、われわれもそれによって育てられたと思っています。」と述べている²⁷⁾ように、農協ビルは当時の広島では極めて斬新なデザインになっており、初の鉄筋コンクリート造事務所建築として、戦後の荒廃から立ち上がる近代的な事務所建築のモニュメントでもあった。このように、農協ビルは、終戦直後の広島の復興を語る上で重要な意味を持つ建物であった。



写真1 広島農協ビル(昭和25年竣工)

表-3 晩設計事務所時代の村田正の作品(昭和23年~昭和28年)

作品名称(協力・構造・竣工年・所在地・保存状況)
○農協ビル(単・RC造・昭和25・広島市・撤去) ○大正海上火災保険広島支店(共・RC造・昭和25・広島市・現存) ○広島百貨店(共・RC造・昭和27・広島市・撤去) ○呉社会保険出張所庁舎(共・RC・昭和28・呉市・撤去) ○広島中央放送局舎増築(共・RC造・昭和28・広島市・現存) ○広島中央放送局農社宅(共・RC造・昭和29・広島市・撤去)。

注：表-3は『広島市の建築Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(広島県建築士会昭和31年、37年、58年発行、非売品)、故河内義就、村田正が残した資料を参照し、大旗の証言により作成した。なお、「単」は単作を示し、「共」は共同作品を示す。

3-3. 村田・大旗建築事務所時代

昭和29年6月大旗は村田正とともに村田・大旗建築事務所を開設する。この頃丹下健三設計のピースセンター(昭和30年竣工)や村野藤吾設計の平和記念聖堂(昭和29年竣工)も建設を迎え、また河内義就、大旗らの地域に根ざした建築家の活動により、広島でも建築事務所が社会的に認められ始めた。

まず晩設計事務所時代の知人である広島県信用農業協同組合連合会長桑田哲夫の推薦で連合会の尾道、福山、庄原、西条、三次支所(昭和35年)など県内の連合会関連施設の数多くの建築設計に携わる。また社会保険広島市民病院(昭和26年)の設計が高く評価され、なおかつ昭和34年10月1日八幡製鐵総合病院全国設計競技において1等入選²⁸⁾(写真5)を契機に、広島、山口、岡山を中心に、福岡、北海道、神戸等まで幅広く地域の医療施設関連建築の設計活動を行うこととなった。昭和36年9月米国ならびに欧州各地の厚生施設、特に病院施設を重点的に考察研究する。彼の主な病院建築設計として社会保険岡山病院、同神戸中央病院や国立山口労災病院、福岡県済生会八幡病院、北海道登別厚生年金病院、尾道農協病院などがある。なお、晩設計事務所時代に大正海上火災保険株式会社広島支店(昭和25年)を設計したこともあって、それをきっかけに同静岡支店、福岡支店、長崎支店、下関支店、大分支店、宮崎支店、熊本支店などの設計依頼を受ける。さらに、晩設計事務所時代に朝日新聞社広島支局と毎日新聞広島支局(昭和23年)を設計したのが高く評価され、朝日新聞社呉支局、宮崎支局、徳山支局、毎日新聞社福山支局、和歌山支局などメディア関係の建築を数多く設計する。そして百貨店建築として広島屋百貨店を始め、大阪正金百貨店桜橋店、梅田店、難波店、阿倍野店などの商業建築の設計に携わる。なお、西林寺、広島市信用組合同洋支店などの傑作がある。昭和34年12月北九州戸畑文化センター設計競技において1等入選²⁹⁾し、昭和35年広島県建築士協会建築作品コンクールにて日本赤十字社広島支部作品の受賞が決定する。この時期の大旗の主な作品を表-4に示す。

ここで、大旗の代表的な作品を幾つか取り上げて見よう。昭和33年5月安芸郡坂町に建てられた西林寺の建築(写真2)は鉄筋コンクリート造で建てられ、そのファサードには、基礎台を高くして階段から上ると4本の柱によって山門型の入り口をデザインし、軒下の周りには斜めに交差する日本伝統的な格子窓をデザインするなどの特徴がある。なお、昭和34年5月竣工の広島市信用組合同洋支店の建築(写真3)においても、入り口の正面には2階に伸びる4本の柱によって外廊下を設け外観を飾り、窓には異なる格子模様のデザインを施している。昭和35年10月竣工の広島県信用農業協同組合連合会三次市支所の建築(写真4)は、鉄筋コンクリート打放しの柱、軒と窓の格子によって外観がデザインされ、その入り口には4本の柱がピロティ空間を構成しているなどの特徴がある。このように日本伝統的なものを新しい材料と技術によって表現しようとした工夫が読み取れる。昭和36年竣工の尾道農協病院は外来と中央診療部門を1階に配置し、中庭を挟んで自由に伸びる動線計画になっており、病室は市街地を考慮して2階以上に求め、中廊下式となっているなど、合理的な病院計画を試みた。外観は水平線に走る軒蛇腹や庇が強調され、単純で清潔な感じを与えている。昭和36年北九州市八幡区に建てられた八幡製鐵所総合病院は、そのファサードは水平線に走る軒蛇腹が強調され、屋上の機械室とともにプロポーションを配

慮するなどの特徴を表わしている。これらの病院建築は機能を最優先する上で、モダン感覚の外観デザインを施しており、清潔な白いタイルを貼るなどの共通点が見取れる。

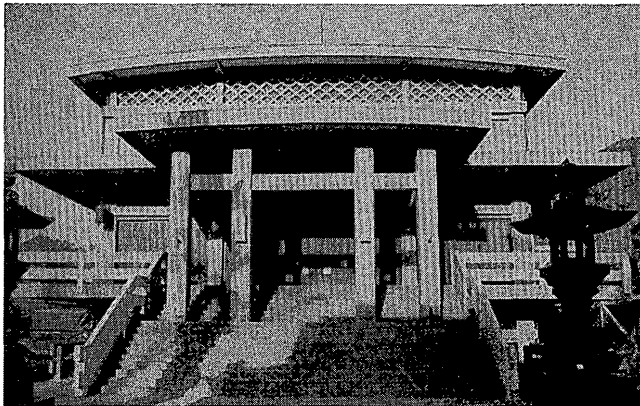


写真2 西林寺 (昭和33年竣工・現存)



写真3 広島市信用組合同洋支店 (昭和34年竣工・現存)

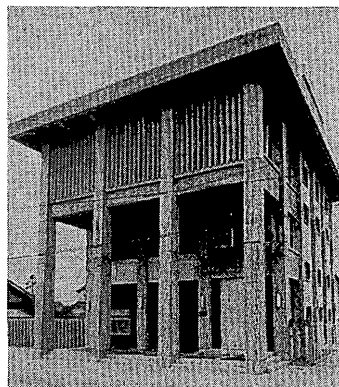


写真4 広島県信用農業協同組合連合会三次支店 (昭和35年竣工・現存)

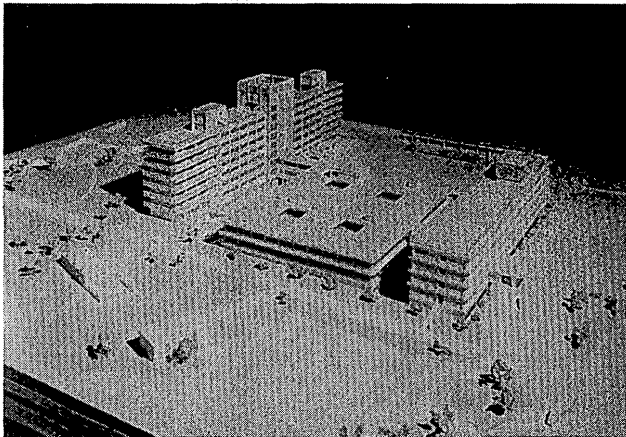


写真5 八幡製鉄総合病院設計案 模型 (昭和34年村田正との協立案)

表一 村田・大旗設計事務所時期の主な作品 (昭和29年～昭和40年)

作品名称 (協力・構造・竣工年・所在地)	
●中国新報社増築 (共同・RC造・昭和30・広島市)	●中沢病院 (共同・RC造・昭和30・広島市)
●広島県信連海田市支所 (共同・RC造・昭和30・広島県海田町)	●尾道厚生病院 (共同・RC造・昭和32・尾道市)
●西林寺 (単作・RC造・昭和33・安芸郡佐伯町)	●広島市信用組合同洋支店 (単作・RC造・昭和34・広島市)
●広島県信用農業協同組合連合会三次支店 (単作・RC造・昭和35・三次市)	●尾道農協総合病院 (単作・RC造・昭和36・尾道市)
●八幡製鉄総合病院 (単作・RC造・昭和36・北九州市)	●電々公社湯田保養所 (単作・RC造・昭和40・山口市)
●北海道登別厚生年金病院 (共同・RC造・昭和35・登別市)	●社会保険神戸中央病院 (共同・RC造・昭和38・神戸市)
●社会保険岡山病院 (共同・RC造・昭和37・岡山市)	●社会保険徳山中央病院 (共同・RC造・昭和39・徳山市)
●社会保険小倉記念病院 (共同・RC造・昭和41・小倉市)	●岡山県済生会病院 (共同・RC造・昭和44・岡山市)
●愛媛県済生会病院 (共同・RC造・昭和45・愛媛県)	●キャバレーホノルル (共同・RC造・昭和39・広島市)
●久留米医科大学市立病院 (共同・RC造・昭和45・久留米市)	●国立山口労災病院 (共同・RC造・昭和45・山口市)
その他	

注：表一は『広島建築Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(広島県建築士会昭和31年、37年、58年発行、非売品)、故河内義就、村田正が残した資料を参照し、大旗の証言により作成した。

3-4. 大旗連合建築設計事務所時期

大旗は昭和41年に村田と別れ、大旗連合建築事務所を設立し、彼の設計活動は昭和53年まで続く。事務所は拡大され、九州支社、北九州事務所、福山営業所、山口営業所、徳山営業所を設けている。大旗は「建築士一人一人の人間性と能力が、建築士事務所という連帯の中から引き出される」と述べ、これらの成果をあげることができたのは建築事務所の所員一人一人の力の連合の結果であることを強調している。いずれにしろ、建築というものを総合芸術の一環として捉え、広い立場での協力はよき結果を生むという大旗らしいオープンな心構えは、大旗連合設計といった設計組織の創り方、その運営などにもよく表れているのである。「人と建築の交わりを求めて」は大旗が常に心の底において建築作品の中に追求してきた言葉であり、大旗連合建築設計の精神であった。大旗は「その心は、所員一人一人の中に刻み込まれ建築作品となっている。」と述べている。浜口隆一は「大旗氏の事務所の数多くの作品のうち、私はそう沢山はみていないが、いずれもその制作態度を好ましいと思った。」³⁰⁾と述べ、大旗連合事務所の制作態度を評している。佐藤重夫³¹⁾は「近頃は社会の変転が著しく、多くのことが目立つことに目が向けられてばかりいるようで、その忙しさは驚くばかりであります。山野や海面すらこの人の世の風潮に災いされて寂しい思いにいらのですが、そういった中であって、静かに落ちついた、また自然に溶け込んだ作風を秘かに求めておられる大旗君は、私の郷土である中国地方に一つ一つの美を加えて下さるうれしい友人の一人であって、心温まる思いでいます。」と述べ³²⁾、大旗の作風について高く評している。なお、浜口隆一は「大旗氏は、環境ということに、深い理解と強い関心を持ち続けている人のようだ。これは、大旗氏が日頃、地方都市・広島に住み、そこを中心として仕事を集積されている故であろう。地域開発のことが日常現実の課題だろう。いわゆる地方建築家こそが、地域に根ざした建築家であるという、単純ともいえるが、否否がたい真実に触れているからである。」³³⁾と述べているように、大旗は地域に根ざして精力的に建築活動を行い、その地域の建築発展に及ぼした影響は大きい。昭和43年～昭和53年広島市建築法規研究会理事。昭和47年6月大旗は、村田・大旗建築事務所時代の作品をも含めて『人と建築の交わりを求めて／大旗連合建築事務所作品集』(創造者)を発行する。なお大旗連合建築事務所作品は月刊特集『近代建築』1980年5月号、同1984年8月号で紹介されている。この時期の大旗の主な作品をまとめると表一になる。

ここで、大旗の代表的な建築作品を幾つか取り上げて見よう。その代表作として、日本3景の一つである宮島に建てられた宮島町庁舎(昭和44年、写真6,7)、広島の郷土料理の店として有名な酔心ビル本店(昭和46年、写真8,9)、宮島町立宮島中学校体育館(昭和46年、写真10,11)、般舟寺(昭和44年)などの建築が取り上げられる。酔心ビルについて浜口隆一は「広島の郷土料理の店として有名な酔心ビルは商業建築であるとはいえ、強靱にデザイン・ポリシーを貫徹させつつ、多くの協力要素、例えば陶芸を積極的に参加させて、土と人間の心と心の交流といったヒューマンな情感のある空間を作り出している。」³⁴⁾と高く評している。ウズベキスタン時代にタシュケントのオペラ劇場の壁面装飾デザインにかかわる経験をした大旗は、常に陶芸家を招き、陶芸を建築空間に受け入れたのである。これらの手法は、社会保険中京病院(昭和45年)の「光庭」(陶

芸家加藤重高を招き、中庭に設けたもの)、岡山済生総合病院(昭和46年)の「海の幸」(加藤唐九郎を招き、病院玄関に設けた陶壁)や宮島町庁舎の玄関ロビーなどの設計にも表れている。

宮島町庁舎は、昭和43年コンペ(審査委員長は京都大学村田教授)において大旗案が1等入選し、実施設計を担当したものである。戦前横浜高校時代に行った宮島での実測の思いを込め、大旗は精力的に設計に取り組んだ。一見木造に見える庁舎は実は鉄筋コンクリート造(4階建地下1階)である。庁舎の外観や内部空間には、瀬戸内文化発祥地宮島の伝統的な木造のプロポーションを生かしてデザインに取り組むなどの創意工夫が読み取れる。なお会議場、ロビーには陶芸家加藤唐九郎を招き、陶壁を入れるなど陶芸を積極的に取り入れ、まさに土と人間の手と心の交流といったヒューマンな情感のある空間を作り出している。これらについて大旗は「デザインに対する考え方も変化し、建築が一人の建築家だけの手になるものではなく、造園家やインテリア、グラフィック、ディスプレイ等のデザイナーとの協調の上に成立するのだ。」と述べている。全体的に見ると宮島という自然環境に溶け込んだような意匠になっている。瀬戸内文化発祥地宮島の歴史、それに伴う文化の変遷及び設計様式、またこれらの母体となる島全体の自然条件を改めて理解再認識することを、そのテーマとしたのである。大旗は「建築家にとって厳島神社祇殿の超自然的な姿、平安末期の神仏混沌時代の美の結晶ともいべき宮島の中に、町民センターともなる庁舎の計画をなすのは、この上もない大きな難題である。それは半永久的に神社祇殿とともに生きていく庁舎であるから。」と庁舎の位置付けを述べている。

このように、新しい技術や材料を利用して地域の伝統文化を建築に表現しようとした大旗のデザイン工夫は、彼の作品によく見られる。これらは大旗も述べている³⁵⁾ように、恩師中村順平の古典に根ざす建築の根元的な美の把握を目指した建築教育が大旗の建築活動に一貫して大きな影響を及ぼしたことを裏付ける。

表-5 大旗連合事務所時期の主な作品(昭和41年~)

作品名称(協力・構造・竣工年・所在地)
●須磨赤十字病院(単作・RC造・昭和45年・神戸市) ●岡山県済生会総合病院(単作・RC造・昭和46年・岡山市) ●久留米大学付属病院(単作・RC造・昭和48年・久留米市) ●社会保険名古屋中京病院(単作・RC造・昭和45年・名古屋市中区) ●宮島町庁舎(単作・RC造・昭和44年・広島県宮島町) ●秋芳総合センター(単作・RC造・昭和45年・山口県秋芳町) ●河内小学校(単作・RC造・昭和43年・広島県五日市) ●宮島町立宮島中学校体育館(単作・RC造・昭和46年・広島県宮島町) ●投舟寺(単作・RC造・昭和44年・広島市) ●九州厚生年金老人ホーム(単作・RC造・昭和48年・北九州市八幡区) ●広島県農協研修会館(単作・RC造・昭和46年・広島市) ●農協ビル新館(単作・RC造・昭和45年・広島市) ●尾道農協会館(単作・RC造・昭和43年・尾道市) ●広島信用金庫豊前支店(単作・RC造・昭和45年・広島市) ●熊野町農協会館RC(単作・造・昭和44年・広島県熊野町) ●大野町農協会館(単作・RC造・昭和46年・広島県大野町) ●新日本製鉄大山寮(単作・RC造・昭和45年・鳥取県大山町) ●酔心本店(単作・SRC造・昭和46年・広島市) ●平安閣(単作・RC造・昭和47年・広島市) ●広島国際プラザホテル(単作・SRC造・昭和46年・広島市) ●サロン・ファンタジー(単作・RC造・昭和42年・岡山市) ●タツミ会館(単作・S造・昭和46年・広島市) ●広島錦水ホテル(単作・RC造・昭和45年・広島市) ●戸坂ボール(単作・S造・昭和47年・広島市) ●能美海上ロッジ(単作・RC造・昭和42年・広島県能美町) ●因島ロッジ(単作・RC造・昭和46年・因島市) ●倉敷平安閣(単作・RC造・昭和51年・倉敷) ●北九州八幡信用金庫本城支店(RC造・昭和52年・北九州市) ●日本赤十字社山口支部庁舎(RC造・昭和52年・山口) ●新北九州信用金庫北方・黒崎支店(RC造・昭和53年・北九州) ●徳山中央病院健康センター(RC造・昭和54年・徳山) ●西福岡社会保険事務所(RC造・昭和54年・福岡) ●広島電気学園キャンパス計画(昭和54年・広島) ●山口県厚生連第一病院(RC造・昭和55年・山口) ●総合病院山口赤十字病院(RC造・昭和55年・山口) その他。

注:表-5は大旗正二氏に聞き取りを行い、また『人と建築の交り求めて...あゆみ/大旗連合建築設計作品集』創設社、昭和47年6月15日発行。『大旗連合建築設計株式会社経歴書』(1954年~1986年作品経歴)内部資料や『広島建築I・II・III』(広島県建築士会昭和31年、37年、58年発行、非売品)を参照し筆者が作成した。

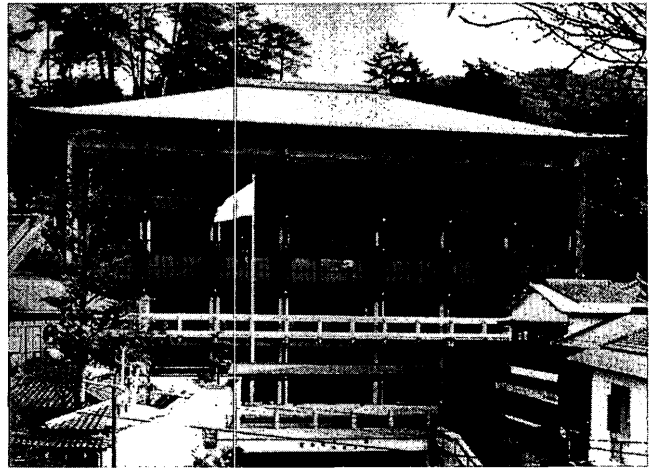


写真6 宮島町庁舎外観(昭和44年竣工・現存)

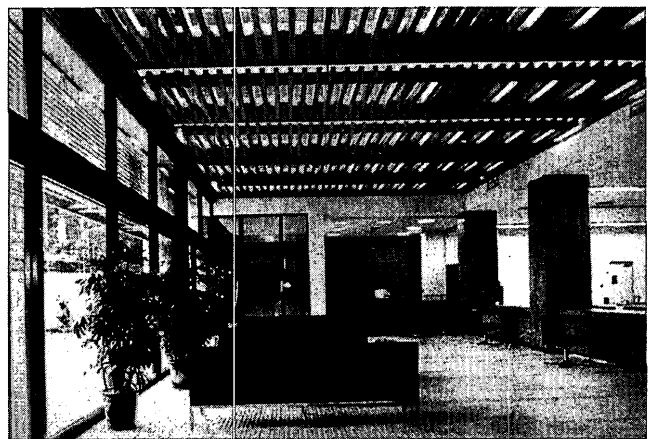


写真7 宮島町庁舎玄関ロビー



写真8 酔心本店(昭和46年・現存)

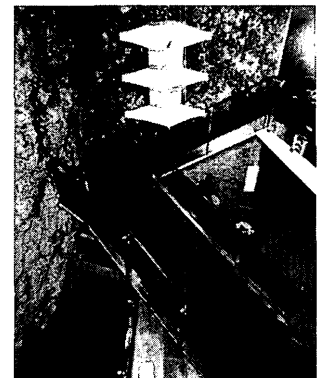


写真9 酔心エントランスホール内観

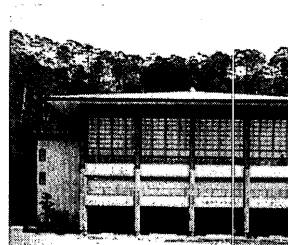


写真10 左:宮島中学校体育館(現存)



写真11 右:入り口(昭和46年竣工)

4. 結び

以上のように、中村順平の弟子であった大旗は、戦前満鉄での建築活動を経て、戦後は地方都市広島を拠点に中国地方を中心として

精力的に建築活動を行い、中国地域においては大きな影響力を有した建築家であったことが明らかになった。

大旗は、建築家河内義就とともに、広島県建築士事務所協会の創始者の一人であり、広島の復興建築において大きな役割を果たした建築家であった。大旗が関係した復興建築は、当時の背景の中で数多く、個々の建築には彼の心血が注がれている。特に被爆建築など周囲環境との調和を深く意識してデザインした戦後初の民間鉄筋コンクリート造事務所建築である農協ビルは、平和記念公園、世界平和記念聖堂のように注目されるほどの建築物ではなかったが、その建設過程は広島の復興を語る上で重要な意味を持っただけでなく、日本の戦災復興史を語る上でも興味深い建物である。また、大旗の作品傾向として、尾道農協病院、八幡製鉄総合病院などの病院建築には、機能を最優先する上でモダン感覚の外観デザインを施しており、清潔な白いタイルを貼るなど、戦後モダニズムの潮流に乗ったものの、西林寺、広島市信用組合向洋支店、広島県信用農業協同組合連合会三次支店、宮島町庁舎、酔心本店などの建築のように、新しい技術や材料を利用して地域の伝統文化を積極的にデザインに導入するなどの傾向が読み取れる。これらは恩師中村順平の古典に根ざす建築の根元的な美的把握を目指した建築教育が大旗の建築活動に一貫して大きな影響を及ぼしたことを裏付けるだろう。また、常に陶芸を建築空間に受け入れるなど、開いた視野で、広く協力を求め、また連合という事務所の経営方式を取り入れ、建築というものを、広い立場での協力なしにはよさが出ないというオープンな心構えを持つなど、大旗流の姿勢が見られる。なお、戦前から一貫して、積極的に各種コンペ活動に参加し、一定の成果を挙げている。

大旗は、地域に根ざして精力的に建築活動を行い、その地域の建築発展に果たした役割は大きい。特に建築家河内義就らとともに、戦後の広島の建築設計界のルーツとして、広島を中心とする中国地域においては大きな影響力を有した建築家であったといえよう。

【謝辞】：本論文をまとめるにあたり、大旗正二氏から貴重な情報をいただいた。また(有)河内義就設計事務所代表取締役河内国利氏、(株)村田相互設計本社取締役総務部長栗本氏から貴重な資料を提供されていた。なお「戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究」グループの客員教授グループであった東京大学教授藤森照信先生、京都大学助教授布野修司先生からは貴重なご教示をいただいた。記して深謝申し上げる。

【注】

- 1) 村田正二、大正3年12月15日広島市で生まれ、昭和8年3月15日広島市立広島工業学校建築科を卒業、同年4月広島県土木部管轄現場監督員として勤務、昭和13年4月から昭和15年5月にかけて東京の渡辺仁建築事務所所属していたが、広島に帰り、昭和15年6月からは東洋工業株式会社就職、昭和21年4月に建設設計事務所を設立する。昭和29年には村田・大旗建築事務所を設立し、昭和41年に村田相互設計事務所を設立した。昭和54年広島市建築行政協会会長に就任、昭和61年11月日本建築家協会会員として永年の功績に対し終身会員に推挙されている。平成元年1月23日広島で死亡。
- 2) 李明、石丸紀興「終戦直後の広島における建設設計事務所」について「戦前・戦後の広島における建築家の活動とその役割に関する研究」日本建築学会計画系論文集第537号2000年11月pp311-318。
- 3) 西澤泰彦「建築家中村世與資平の経歴と建築活動について」日本建築学会計画系論文集第450号1993年8月P151~160。
- 4) 河内義就は大正2年6月13日広島市国楽寺町で生まれ、昭和6年3月広島県立広島第一中学校卒業、昭和10年3月横浜高等工業学校建築科を卒業し、中村順平の弟子となる。卒業後、逋言省の経理局管轄課において、山田守の下で仕事をし、昭和14年7月満州国郵政局経理科管轄設計士に就任、昭和18年4月技佐に昇任する。昭和19年9月満州国大学院17期後期修了、昭和20年8月19日免官帰国、翌年10月建設設計に参加したのである。昭和23年の広島世界平和聖堂のコンペにて準佳作、翌年3月10日広島平和公園設計設計競技に入賞、昭和26年河内義就設計事務所を設立する。昭和38年広島設計監理協会会長、昭和53年広島県建築事務所協会7代目会長、昭和62年10月5日広島で死亡。
- 5) 資料的には、可能な限り終戦直後時期に関する資料を収集することにつながるが、そのために例えば少しでも建設設計について優れた文献・資料を検索・収集すること、(仮)村田正

(仮)河内義就、大旗正二の本人や遺族と連絡を取り、訪ねるなどして私的な資料を含めて収集することによって補完した。生前村田正二が昭和60年10月1日のヒアリング調査、生前河内義就が昭和59年3月28日ヒアリング調査、大旗氏こそ平成11年2月15日よりヒアリング調査を行った。

- 6) 西澤泰彦「建築家中村世與資平の経歴と建築活動について」日本建築学会計画系論文集第450号1993年8月P151~160、角幸博「建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について」日本建築学会計画系論文集第465号1994年11月P175~181、上田恭嗣「建築家斎藤寺主計の経歴と建築活動について」日本建築学会計画系論文集第509号1998年7月P209~215、石田潤一郎『関西の近代建築』中央公論美術出版社、1996年、川島智生「大正期大阪市の鉄筋コンクリート造小学校の成立と民間建築家の関与について」日本建築学会計画系論文集第489号P213、1996年11月、石丸紀興、李明「建築家増田清の経歴と広島における建築活動について」日本建築学会計画系論文集第525号1999年11月P327~334。
- 7) 中村順平はエコール・デ・ボザルの巨匠ともいえるべき教育法でFrench Renaissanceを目指して製図の指導に当たったとされている。
- 8) 大旗正二によると、満州では南満州鉄道株式会社大連本社地方部建築課に所属したというが、西澤泰彦「南満州鉄道株式会社の建築家—その変遷と特徴」『アジア経済』35巻7号、1994年7月)の図5「本社建築課」と「鉄道総局建築課」の変遷によると、「地方部建築課」は昭和5年に変遷して「地方部工事課」になっているので、大旗が就任する昭和9年頃には地方部工事課が正しい可能性が高く本稿ではそれに従う。
- 9) 大旗正二談、この制度の実施については、西澤泰彦「海を渡った日本人建築家/20世紀前半の中国東北地方における建築活動」朝国社1996年12月10日P181~185を参照。
- 10) 加藤善九郎「海の幸、唐九郎作」/『人と建築の交わりを求めて…あゆみ/大旗連合建築設計作品集』創設社、昭和47年6月15日発行)に所収。
- 11) 筆者と大旗談。
- 12) 建設設計事務所は広島市立広島工業学校建築科を卒業し、広島県土木部管轄現場監督員を経て、東京の渡辺仁建築事務所で仕事をし、また東洋工業株式会社で建設設計の仕事に従事していた村田正二が広島において栗本実とともに昭和21年4月に設立したのである。そして中村順平の弟子の一人であり、逋言省管轄課で山田守の下で仕事をし、満州国郵政局に出向していた河内義就は、郵政省への帰還を返上して焼野原広島での新しいまちづくりに参加することを選択し、昭和21年10月に建設設計事務所に参加したのである。
- 13) 建設設計事務所「建築家のパーソナリティと作品」(浜口隆一氏との対談)により。
- 14) 大旗正二の証言と村田相互建築設計事務所の資料によって確認した。
- 15) 広島市建築行政協会創立30周年記念誌『よせむね』(昭和58年1月28日発行)による。なお、藤田謙堂というのは昭和27年藤田組によって建設された藤田ビルの講堂を指す。
- 16) 平成11年2月15日大旗正二へのヒアリング調査による。
- 17) 大旗によると、その友人事務所の名称を覚えていない。
- 18) 西澤泰彦「南満州鉄道株式会社の建築家—その変遷と特徴」『アジア経済』35巻7号、1994年7月、P302~314)によると、島田が昭和12年まで南満鉄本社地方部大連工事事務所所属になっていたが、その以降は不詳である。
- 19) 大旗への聞き取りと、西澤泰彦「南満州鉄道株式会社の建築家—その変遷と特徴」『アジア経済』35巻7号1994年7月、P302~314)によって補完した。
- 20) 浜口隆一「建築家・大旗正二氏のこと」(『人と建築の交わりを求めて…あゆみ/大旗連合建築設計作品集』創設社、昭和47年6月15日発行)による。
- 21) 加藤善九郎「海の幸、唐九郎作」(『人と建築の交わりを求めて…あゆみ/大旗連合建築設計作品集』創設社、昭和47年6月15日発行)による。
- 22) 平成11年2月15日大旗正二へのヒアリング調査による。
- 23) 広島市建築行政協会創立30周年を迎えて/会長挨拶/会長村田正二(広島市建築行政協会創立30周年記念誌『よせむね』昭和58年1月28日発行)に所収)。
- 24) 河内義就「30年を顧みて」(広島市建築行政協会創立30周年記念誌、『よせむね』昭和58年1月28日発行)に所収)による。
- 25) 農協ビルは34年間の歴史的な使命を完成し、昭和59年に取り壊され再建した。
- 26) 市役所が昭和3年3月に建築家増田清の設計によって建てられた。その建物については石丸紀興、李明「建築家増田清の経歴と広島における建築活動について」日本建築学会計画系論文集第525号P327~334、1999年11月号で紹介されている。
- 27) 建設設計事務所「建築家のパーソナリティと作品」(浜口隆一氏との対談)による。
- 28) 大旗氏の証言を基に『広島建築士会創立25年史(1952年~1976年)』pp84「昭和34年10月1日、日本最大といわれる八幡製鉄所の競技設計において入選の栄誉を受けられた。」により確認した。
- 29) 大旗氏の証言を基に『広島建築士会創立25年史(1952年~1976年)』pp84「昭和34年12月戸畑文化センター競技設計において入選せられた。」により確認した。
- 30) 『人と建築の交わりを求めて/大旗連合建築設計作品集』(創設社、昭和47年6月)。
- 31) 戦後岡山で建築事務所を営んでいた佐藤重夫がその後、広島大学工学部教授、広島大学工学部名誉教授、国立呉工業専門学校校長を歴任する。1999年日本建築学会大賞受賞(建築歴史・意匠分野)における教育・研究上の多大な功績と文化行政に対する多大な功績、原爆ドーム保存における技術的な貢献による)
- 32) 佐藤重夫「美しさ」(『人と建築の交わりを求めて/大旗連合建築設計作品集』創設社、昭和47年6月に所収)による。
- 33) 浜口隆一「建築家・大旗正二氏のこと」(『人と建築の交わりを求めて/大旗連合建築設計作品集』創設社、昭和47年6月に所収)による。
- 34) 浜口隆一「建築家・大旗正二氏のこと」(『人と建築の交わりを求めて/大旗連合建築設計作品集』創設社、昭和47年6月に所収)。
- 35) 建設設計事務所「建築家のパーソナリティと作品」(浜口隆一氏との対談)による。

【写真出典】：図1、図2、写真2~11は大旗正二氏提供。写真1は広島市建築行政協会創立30周年記念誌、『よせむね』(昭和58年1月28日発行)に所収。

(2003年3月6日原稿受理、2003年10月27日採用決定)